

# イジッコ

## —山村の手しごと—

日光市歴史民俗資料館

日光市今市 304-1

TEL : 0288-25-7333

令和4年(2022)10月21日発行

### 1. イジッコとは

イジッコとは、岩芝（ミヤマカンスゲ）と呼ばれる植物を縄にして、袋状に編んだものです。岩芝は、丈夫で水に強く、縄にするのに適していたため山村の仕事（山菜採り、木の伐採、狩猟など）の必需品でした。鎌・鉋などの道具や弁当箱を入れたり、山で採った山菜などを入れて、バッグのように使用していました。用途によって素材が異なり、ヤマブドウやワラ、シナの木の皮なども使われていました。イジッコ（エジッコ、エジコ）という名前は、三依地区や福島県会津地方の呼び方です。湯西川地区ではビク、鹿沼市粟野ではセゴシッコなど地域によって呼び方が変化します。

かつて、イジッコはどの家にもあり、作り方は親から子、子から孫へと伝えられてきました。しかし生活様式の変化に伴い、イジッコづくりの技術は継承されにくくなってしまいました。過去には、三依地区の岩芝民芸品づくりの技術が市指定文化財に指定されていましたが、技術保持者が亡くなったことにより指定解除になってしまいました。



岩芝（ミヤマカンスゲ）



岩芝を乾燥させて撚った縄

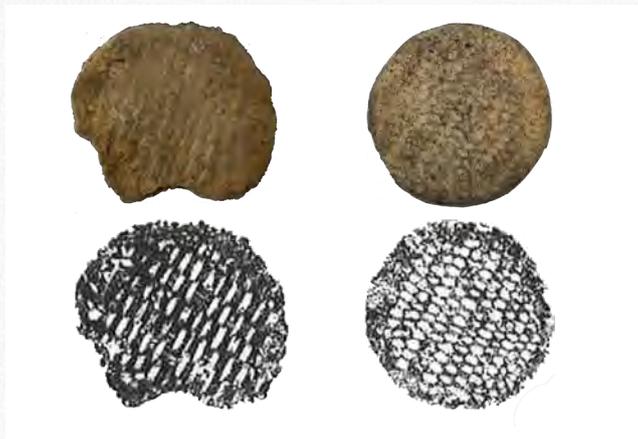


左：イジッコ（日光市蔵）  
 右：イジッコを背負う男性（奥会津博物館蔵）

#### 1-1. 編み物の起源

ところで、縄文時代には樹皮や植物のつるなどを使って編まれたかごなどの編み物が利用されていました。このような植物を材料として作られた製品は腐りやすく残ることはほとんどありませんが、土器を作る際に敷いた編み物の痕跡が圧痕として土器の底に残ることがあります。

日光市内の遺跡からもこのような土器が数多く出土しており、様々な編み物製品が作られていたことが分かります。こうした編み物の製作技術は、日用品や工芸品として現代に引き継がれています。



縄文土器の底に残された編み物（左）と縄文（右）の痕跡  
 （日光市仲内遺跡）



あんざん編布の復元  
 （縄文時代から日本に存在したとみられる編物の技法で作られた布）

## 1-2. 市内最古？のイジッコ

右の写真は、二宮金次郎（尊徳）の息子弥太郎（尊行）が弁当入れに使用していたイチコ（イジッコ）と考えられています。

弥太郎は、嘉永6年（1853）から父金次郎とともに日光神領の農村復興事業（報徳仕法）を行ない、慶応4年（1868）まで今市で過ごしていました。

このイジッコは、いつ作られたものかわかりませんが、今から150年以上前に使われていたものと考え、市内に残る最古のイジッコかもしれません。



イチコ（日光市二宮尊徳記念館蔵）

## 2. 日光と会津のつながり

日光と会津は、政治面や文化面で古くからつながりがありました。そのつながりは、縄文時代から確認できます。三依地区や湯西川地区からは、東北地方南部の特徴がある土器が出土しています。

鎌倉時代には、藤原秀郷の子孫である長沼氏が、現在の南会津町を中心とした長江荘を支配します。三依地区には長沼氏が築城したと伝わる戦国時代の山城が残っています。

江戸時代には、会津地方の南側と三依地区が幕府領となっていました。この幕府領は、南山御蔵入領と呼ばれていました。現在の日光市内では、五十里以上の五十里・独鈷沢・芹沢・中三依・上三依・横川が南山御蔵入領に属しており、上記の範囲は河島（川島）組三依郷と位置付けられていました。

また江戸時代に会津西街道が整備され、街道沿いには宿場が形成されます。会津藩主が、参勤交代の際に通行したほか、日光東照宮への参詣者など多くの人の往来がありました。また商品の輸送道路としても使われました。

### 2-1-①. 仲附騨者

南山御蔵入領は、寒冷で、田が少なく畑が多い土地でした。領民は、年貢をすべて現金で納めていましたが、畑作だけでは年貢のお金は賄いきれませんでした。そこで領民は、年貢の不足分を補うための現金稼ぎとして一人で6頭ほどの馬を牽いて荷物を運ぶ運送業に従事します。この運送業に従事した人々を仲附騨者（単に仲附とも）と言います。宿場ごとに荷物を引き継がず、一人で目的地まで荷物を運送するのが仲附の特徴です。

かつて藤原宿には、仲附が宿泊していた旅籠があり、現在鬼怒川公園に移築されています。



鬼怒川公園内にある仲附の旅籠

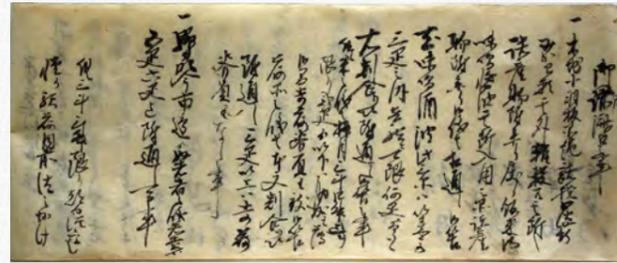


南山御蔵入領の範囲と三依郷の範囲

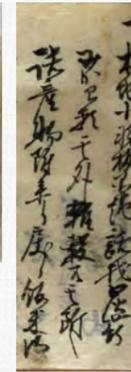
『田島町史』第2巻 通史II近世（田島町、1988）、『奥会津の豪商細井家の300年～歴代当主10人の生き方と事績をたどる』（奥会津町教育委員会、2018）、『藤原町史』通史編（藤原町、1983）より作成

### 2-1-②. 仲附の輸送品

下の写真の古文書から、仲附が輸送していた品目がわかります。会津地方からは、木地（漆を塗る前のお椀など）、小羽板（屋根に葺く薄い板）、品縄（シナの木の皮を使ったの縄）や材木、炭や薪などの会津地方の産物を今市方面に送り、その販売代金で酒、味噌、醤油などを会津へ持ち帰ることをしていました。



仲附の輸送品が書かれている古文書（星七郎家文書16、当館蔵／日光市指定文化財）



一、木地・小羽板・品縄・諸材・炭・薪・みかわ類其外雑穀共其所之諸産物附参り戻り……



会津西街道のルートと宿場

『栃木県歴史の道調査報告書』第三集（栃木県教育委員会2015）、佐藤権司『会津西街道の歴史を歩く』（随想舎、2010）より作成



下草刈りに出かける女性たち（奥会津博物館蔵）

### 2-2-①. 奥会津博物館の文化財

南会津町の奥会津博物館には、農具、木地師の用具、川での漁撈用具、仲附などの交易に用いられた運搬用具など24,000点以上の民具が収蔵されています。そのうち、5,000点余りが「奥会津地方の山村生産用具」として国の重要有形民俗文化財に指定されています。これらの民具の調査には、武蔵野美術大学が協力をし、1点ごとに精緻な実測図がつけられました。

会津地方とつながりの深い日光市内にも、文化財級の民具が残っているかもしれません。

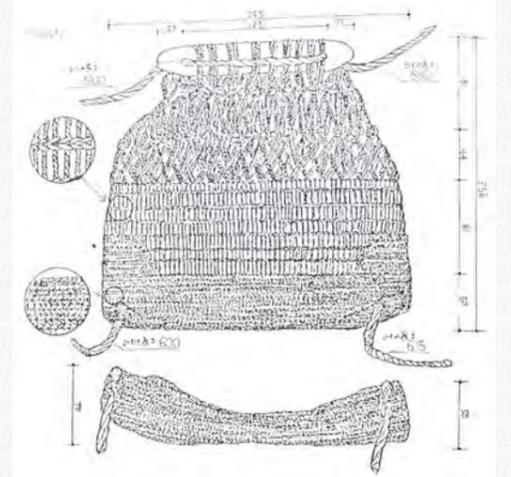
### 2-2-②. 国指定のイジッコ

下の写真は、奥会津博物館所蔵の国の重要有形民俗文化財に指定されているイジッコです。材料は、岩芝（南会津ではヤマシバ、ヒロロと呼ばれています）です。このイジッコは、山菜や野菜を採りに行く時、弁当入れ等に使われていました。

右下の実測図では、編み目まで細かく描き込まれています。奥会津博物館には、この他にも国指定のイジッコが多数収蔵され、一点一点に精緻な実測図が作られています。



イジッコ（奥会津博物館蔵／国指定重要民俗文化財）



イジッコの調書の実測図（奥会津博物館蔵・部分）

### 3. 現代につながるイジッコ

現在、日光市内ではイジッコや岩芝を使った民芸品づくりの継承が行なわれています。栗山地域に赴任している地域おこし協力隊の林千緒氏が、積極的に活動しています。林氏は、湯西川在住の阿部征子氏（上三依出身）からイジッコづくりを学び、講座などで教える立場になっています。私たちの先祖の手によって連綿と続いてきたイジッコづくりは、阿部氏や林氏の活動によってこれからも継承されていきます。

#### 3-1. イジッコのつくり方



#### 3-2. 地域おこし協力隊の活動

栗山地域で活動している地域おこし協力隊の林千緒氏が、イジッコなど岩芝民芸の技術継承を行なっています。林隊員から以下のコメントをいただきました。

(林隊員)「以前は栃木県内の山間部に広く残っていた岩芝民芸ですが、原料の岩芝が鹿の食害のために失われつつあることや、縄燃りや細かい編み技術の難しさにより、完全に廃れつつあります。現在、技術を継承しているのは湯西川地区の阿部征子氏のみで、私は先生からその技術を継承しています。原料確保も大変ですが、編みにも細かい決まりがあり、整った形に編み上げるまでには本当に難しいです。活動始めてから2年間はビニール紐などを使い、編みや縄燃りをひたすら練習していました。今年は原料の確保が安定的にできるようになったことから、岩芝を使い、本格的に技術継承を行っていきます。」



岩芝を編む林隊員と阿部征子氏



阿部征子氏がつくったイジッコ



阿部征子氏が制作したイジッコ



林千緒氏が制作したイジッコ(ビニール紐製)

林隊員の各種 SNS の QR コード



Twitter アカウント



Instagram アカウント

参考文献：佐藤権司『会津西街道の歴史を歩く』(随想舎、2010)、とちぎの小さな文化シリーズ企画編集会議編『栃木民俗探訪』(下野新聞社、2003)、『奥会津地方の山村生産用具』〔I〕(田島町民具研究会、1980)、『奥会津地方の山村生産用具』〔II〕(田島町民具研究会、1981)、『奥会津地方の山村生産用具』〔III〕(田島町民具研究会、1982)、『奥会津の豪商細井家の300年～歴代当主10人の生き方と事績をたどる』(奥会津町教育委員会、2018)、『田島町史』第2巻 通史Ⅱ近世(田島町、1988)、栃木県歴史の道調査報告書 第三集(栃木県教育委員会事務局文化財課、2015)、『藤原町史』通史編(藤原町、1983)、『藤原町史』資料編(藤原町、1980)

協力機関・協力者(順不同)  
奥会津博物館  
阿部征子、猪股淳、加藤彩花、金子朝陽、林千緒、渡部康人